

新IJF試合審判規定について

1. 新ルールについて(手や腕によって帯より下へ直接攻撃または防御は全て禁止)

①ダイレクトに手や腕で脚を攻撃した場合は1回目で直接「反則負け」

たとえば「小内巻込」「肩車」「双手刈」「朽木倒」等

②ただし、柔道精神に反する行為をしたわけではないので、その後の一連の試合には出場できる。

③連絡技として脚を取る場合は、反則負けとはならない。

背負投→肩車、背負投→脚取り、袖釣込腰→脚を握ったりすること、大内刈→脚取り、小内刈→朽木倒…等があり、若干の時差があること。「小内巻込」や脚を持つての「大内刈」などは脚と手が同時の場合は「反則負け」となる。

重要なのは、1つ目の技が「本気で投げに行こうとしているかどうか」であり、フェイントや形だけの技を見せただけで脚を取ることは「反則負け」

④返し技で脚を取ることは反則ではない。

内股を掬投で返す、背負投を掬投で返す、大外刈を掬投で返す…等。ただし、相手が完全に技に入っていない段階で、待ち構えた状態で脚を取って返しに行くことは「反則負け」となる。

⑤「肩車」などは「脚を持ったかどうか」は重要ではなく、帯より下を攻撃すること自体が「反則負け」に値する。

⑥防御については、脚に触れた程度では「反則負け」としない。

⑦脚取りによる「反則負け」は100%確実な場合のみとし、100%未満の場合は、合議や Jury と協議して決定する。

2. 例外(肩越しの片襟組み)について

①片襟を肩越しに組んだ場合、受けは持たれた瞬間に脚を取っても許される。

②肩越しに組んだ選手(取)は、即(1~2秒)攻撃をしなければならない。攻撃動作がない場合は、「待て」として、肩越しに組んだ選手(取)へ「指導」が与えられる。

3. その他の「指導」について

①脚取りが禁止となったため、「巴投」や「捨身技」が増える可能性があるが、投げる意志のない偽装的な攻撃は厳しく「指導」を取る。

②繰り返して場外に下がって出る選手には、積極性に欠ける「指導」を取る。

全国高体連柔道部の新IJF試合審判規定に取り扱いについて(平成22年4月1日より実施)

直接的な反則負けのうち「内股、払腰等の技を掛けるか、又は掛けようとしながら、身体を前方へ低くまげ、頭から畳に突込むこと(通称:ダイビング)」をした場合、その後の一連の試合に出場することはできない。

ただし、団体試合と個人試合は別に考える。

新IJF試合審判規定

(期間:2010年1月1日から2012年12月31日まで)

はじめに

国際柔道連盟(IJF)は、柔道の基本理念を守ることが望んでいる。この考えに基づいて、IJFは特に柔道の教育面、身体面、そして精神面を守り、発展させることに力を注いでいる。

« 柔道は心身の教育システムである »

IJFはオリンピック出場資格獲得期間に試合審判規定を変更しないために、2009パリ世界ジュニア選手権、さらにその後もアブダビグランプリ(UAE、11月20-21日)、青島グランプリ(中国、11月28-29日)、スウォンワールドカップ(韓国、12月4-5日)、グランドスラム東京(日本、12月11-13日)において、新ルールを試行を行い、2010年1月1日から2012年12月31日までの新IJF審判規定が決定された。

新IJF試合審判規定の厳格な適用について

禁止事項: 脚を取ることや防御すること

片手または両手で、もしくは、片腕または両腕で、帯より下への直接攻撃または防御は全て禁止

罰則: 1回目: 「反則負け」

例: 青の選手が「反則負け」



反則にならない場合(認められる場合): 連絡技として脚を取る

本当の技の施技後、明らかな時間差があり、脚を取る

(本当の技とは、投げる意思があり、しっかりと効いた技で、偽装的攻撃の正反対)

同時もしくはほとんど同時に脚を取ることは禁止とし、罰則は「反則負け」とする

例:



反則にならない場合(認められる場合): 返し技で脚を取る

返し技で脚を取ることは許される

相手がかけてきた技を連続して返した場合、これらの返し技は反則にならない。「後の先」の原理。お互いの体の接触(Bodies contact)なしに脚を取ることは禁止。

例:



例外:

相手が「標準的」でない組み方(下記のような組み方)をした場合に脚を取ることは許される



禁止:

相手が「標準的」な組み方の際、相手の腕の下から頭を抜いて逃れた後に、脚を取ることは禁止とする



極端な防御姿勢:両者「指導」



新ルールのよりよい理解のため、罰則を与える際に、審判員は正しいジェスチャーを示すこととする。

審判員システム

試合は1名の主審と副審2名(対角線上)で審判を行う。

2台のビデオカメラで2方向から撮影するCAREシステムを採用し、審判団をサポートする。

CAREシステムの操作と監督はIJF審判委員会で行う。

ゴールデンスコア

ゴールデンスコアにおいてスコアボードに表示された最初の試合の結果は、試合時間以外そのまま残す。ゴールデンスコア終了時に両者優劣がない場合、審判員は最初の試合とゴールデンスコアの双方の内容から判断し判定を行う。

柔道精神に反する行為

試合中いかなる場合においても、柔道精神に反する行為が認められたときは、直接「反則負け」の罰則を課す。